知多半島ケーブルネットワークコミュニティ誌 ［ココナッツクラブ］

COCONUTS CLUB

December 2019 12

やきもの散歩道Mコース

やきもの散歩道Mコース

令和元年の「秋の常滑焼」シリーズ第三弾は、市街南部エリアを巡る新しいやきもの散歩道を提案したい。その名も、南のMから取ったMコース。ちょっとディープなルートを歩けば、今まで見過ごしてきた名品や景観に出会えるだろう。

地元っ子だけが知っている、
やきものの町のディープゾーン。

山方町東部の焼酎瓶の擁壁

奇観！焼酎瓶ウォール

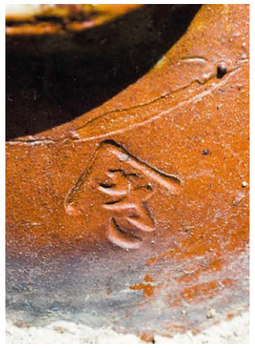
去る十月五日、長らく保全・改修工事中だったＩＮＡＸライブミュージアムの「窯のある広場・資料館」がリニューアルオープンしたが、もうご覧になられただろうか。窯プロジェクションやフォトギャラリー、窯道具類の展示など充実した内容で、往時を知る人も若い世代も楽しめるように心が配られている。

そしてＩＮＡＸライブミュージアムを訪れたなら、もう少し足を伸ばして常滑市街南部の市場・保示・山方から西浦地区の北部まで散策してはいかがだろう。本誌前々号の特集「常滑井戸筒会議」で、山方町に今なお生きる「向山共同井戸」を紹介したが、その取材時に井戸の周囲を巡ってみたところ、面白いやきものアイテムが点在していることに改めて気が付いた。常滑焼視点ではさほど注目されてこなかったエリアだが、町歩きスポットとして意外に高いポテンシャルを秘めているようだ。

ではさっそく歩き始めよう。まずは、やきもの散歩道Ｂコースの終点であるＩＮＡＸライブミュージアムから南へ二百メートルほどの三差路で西に折れ、山際の道に入る。丘を切り開いた緩やかな坂を登りきったところの左手の斜面に、焼酎瓶を埋め込んだ擁壁が出現する。

その擁壁は約五十メートルにわたって続く大規模なもので、焼酎瓶の数もすごい。そしてその擁壁が尽きると、また右側に焼酎瓶の擁壁が約二十メートル延びている。焼酎瓶の擁壁というと、やきもの散歩道Ａコースのハイライト「土管坂」の南面が代表例だが、それよりも焼酎瓶の数は明らかに多い。まるで夥しい数の目玉に見つめられているようで、シュールさも桁違いだ。

焼酎瓶は名前のとおり焼酎を入れる容器で、かつて常滑で大量生産されていた製品のひとつ。正確な創始は定かではないが、江戸時代末期には作られていた。右側の擁壁の焼酎瓶を間近でじっくり眺めると、その多くに「〈き」の刻印があることに気が付く。これは、奥条にあった柿田製陶所の刻印だ。ここは、江戸時代初期にはすでに窯を開いていたとされる常滑で最も古い窯元のひとつ。明治41年（1908）頃から焼酎瓶の生産を主力とし、常滑の焼酎瓶製造元では最大手だった。戦後に至るまで盛んに作られたが、やがてガラス瓶が普及し、昭和40年（1965）頃に製造が打ち切られたという。大量に〈き印の焼酎瓶が使われているのは、工場が割と近くにあったからだろうか。



柿田製陶所の刻印

弁天さんが見守る町、山方

焼酎瓶の擁壁から西へ二百メートルほど進むと交差点があり、左へ曲がるとすぐ山方会館（山方地区の公民館）が見えてくる。桜や松が植えられた広めの敷地内には少し懐かしい風情の鉄製遊具や、ベンチ代わりの電纜管（埋設ケーブル用の陶管）がいくつも置かれている。地区の集会施設の役割を越えて地元の人の憩いの場になっていることが窺え、居心地がよい。

見どころは、建物の傍らに安置されている陶製の弁財天像だ（表紙写真）。慈母にも若い娘にも見える美しい顔立ちの弁天様が、目を閉じて琵琶を奏でている。弁才天は水の女神で、水辺や水にまつわる場所に祀られることが多い。公民館との取り合わせは一見すると不思議な風景だが、祀られているのは水を湛えた円形の池の真ん中である。

かつてこのあたりには「ベザイ池」という池があったが、年々土砂が流入し、戦時中の頃にはすっかり埋まってしまった。戦後、山方の象徴のひとつであったベザイ池の荒廃を惜しんだ地元の人々が発案したのがこの像で、小さな池はベザイ池のかすかな名残だ。初代は昭和26年（1951）の建立で、現在の像は昭和42年（1967）建立の二代目である。

手掛けたのは、戦後の常滑を代表する陶彫家の片岡静観。明治43年（1910）生まれで、常滑陶器学校（後の常滑高校窯業科）を卒業後は花器製造などに携わっていたが、戦後、陶彫の道へと進んだ。質量を伴う作家であり、作品の芸術性が高いだけでなく、常滑の歴代陶彫家で最も作品数が多いとされている。他にも、知多四国第六十一番高讃寺の行基像、常滑市民病院の「健康の像」、武豊駅前の高橋熙像など、市内外で作品を見ることができる。

像の前にはいつも花が供えられており、山方の人に親しまれていることがわかる。祀られた日が五月のこどもの日に近かったことから、今でも毎年五月第一日曜には「弁財天子供まつり」が催されているとか。

山方会館のすぐ前の丘には、「丸山墓地」と呼ばれる共同墓地がある。ここは、高低差のある急傾斜地に大量の土管を積み上げた擁壁が見もの。おそらく常滑市内では最大規模だろう。刻印をチェックしてみると、㊥陶榮、〈長豊和製陶、㋟瀧田製陶所、Ⓣ常滑陶管、Ⓐ愛知陶管工業という土管の大手五社が揃っているのも興味深い。

松下福一による天澤院納骨堂の甕

穏やかな常滑の風景に溶け込む、名工たちの作品群に刮目せよ!

名工父子による名作の競演

その丸山墓地の奥に見える伽藍は天澤院。文明5年（1473）、常滑城を築いた水野忠綱が水野家の菩提寺として開創したという歴史を持つ、曹洞宗の古刹だ。この寺については本誌2014年9月号「常滑陶彫、味わい深きその世界」でも訪れ、明治時代に活躍した冨本梅月（前々号の表紙に掲載した井戸筒の装飾者）が手掛けた柿本人麻呂像や聖観音像を紹介したが、陶彫のほかにも常滑焼の名品がある。それは、大きな甕の天水桶だ。

本堂左手にある納骨堂と薬師堂の屋根の下に各二つずつ、その名品は据え置かれている。いずれも丈が1メートルもある立派なもの。大きさもさることながら、目を見張るのは正面にあしらわれた精緻な昇り龍だ。これは「龍巻」と呼ばれる常滑焼の装飾技法の一種で、顔・胴体・尾を三分割した石膏型で型を取り、器面に貼り付けたもの。龍のまわりの細かなドットと凹凸は雲を表現しており、湧き立つ雲の中を龍が悠然と泳いでいる図案になっている。

これらを手掛けたのは北条の職人、松下福一・衍父子である。納骨堂の方は父・福一が昭和30年（1955）に、薬師堂の方は息子・衍が昭和53年（1978）に制作したもの。父子とも前号で紹介した大物技法のヨリコ造りの名人であり、衍は平成14年（2002）に「大物ヨリコ造り」で常滑市無形文化財に指定されている。

松下家は「カネフク」の屋号で、常滑市陶磁器会館のすぐ近くに工房を構えていた。福一は明治34年（1901）生まれ。長男の衍は昭和元年（1926）の生まれ。衍の三女である相羽民枝さんによると、古くは廻船に積み込んで運ばれた水甕を作っており、戦時中には「呂号兵器／㊟」（ロケット燃料用の貯蔵甕）の製造にも携わるなど、長きにわたり大物を主力としてきた窯元だった。また、戦後には焼酎瓶を手掛けていた時期もあったという。衍は、常滑陶器学校を卒業すると自然に家業に入り、父福一を見て大物作りを覚えたようだ。「父は手が大きくて力があり、仕事も早かったですね。依頼が来るとなんでも断らずに受けていました」と民枝さんは話す。

天澤院の甕は松下家の檀那寺だった縁で寄進したものだが、他にも市内のいくつかの寺に甕を寄進したという。中には注文されて作った品もあったようだが、衍は信仰心の篤い戦前生まれの人らしく「寺からお金はもらわない」というのが信条だったそうだ。また、仕事の合間に趣味で好きな作品を作っており、大きな狸の置物や狸をモチーフにしたユーモラスなオリジナルの甕なども制作した。その一方で、大物の需要が少なくなる時代にあって「窯屋は時代に合ったものを作らなければならない」との考えから、壮年期に急須など小物作りの技術を習得もしたというから、根っから作ることが好きだったのだろう。

天澤院境内に置かれた松下衍による狸の鉢

在りし日の松下衍（提供:相羽民枝さん）

北条の生家には種類も大小もさまざまな名品が保管されているが常時公開はされておらず、とりあえず今、気軽に見ることができるのは天澤院や市内の寺院、公共施設などに置かれたものくらい。それらも案内板などがあるわけではないので、器面に刻まれた銘を自分の目で確認しないとわからない。いつか、その仕事の全貌が明らかにされる時が来るのを期待したい。

そして散歩道は西浦へ続く

天澤院の山門から続く坂道を下ってゆくと、向山共同井戸の北井戸の脇に出る。交差点を渡ってさらに進めば、前々号で取り上げた正住院だ。大きな山門の威容に圧倒されつつ、井戸筒の天水桶も眺めていこう。

続いて、ここから南へすぐのところにある浄土真宗寺院の眞福寺にも立ち寄り、本堂の屋根の下に設えられた甕の天水桶を見ておきたい。こちらのデザインは昇り龍ではなく、鯉の滝登り。甕から水があふれ出るような滝を、二匹の鯉が力強く登ろうとしている景で、古代中国の故事に基づく立身出世を表す伝統的なモチーフだ。御住職によると、明治時代に博覧会に出品されたものだそうで、雰囲気は前々号の表紙写真の、久田窯の井戸筒に近い。また、本

堂前に敷き詰められている唐草模様をあしらった正方形の陶板も面白い。これは「敷瓦」と呼ばれるもので、明治時代に作られたものという。

眞福寺からさらに南へと歩みを進めると、程なくして樽水に入る。市街地が続いているように見えるが、この先はかつて常滑とは別の自治体の旧知多郡西浦町で、西浦北小学校の校区になる。産業の様相も常滑とは少し異なり、窯屋もあったが織布工場の方が多かった。

そんな地域のやきもの的見どころを挙げると、ひとつは前々号で紹介した旧久田窯で明治時代に作られた井戸筒。もうひとつは、知多四国第六十二番札所の洞雲寺で、ここには本堂の前に松下衍が手掛けた甕の天水桶がある。御住職によると、もともと明治42年（1909）に名古屋の人より寄進された製作者不明の甕が一組あったのだが、破損してしまったため平成元年（1989）に再建を依頼したとのこと。もとの甕の口部分には雷紋と雲流紋を組み合わせた模様が施されていたが、それも衍がリンズ（紋様を付ける回転式スタンプ）を作って再現したという。その周りには多くの睡蓮鉢が置かれており、毎年夏には蓮の花が咲き誇るので、その頃にお参りするのもいいだろう。

最後は唐崎町から熊野町にかけての海辺へ。県道252号沿いに社屋と工場が連なるジャニス工業をMコースの終点にしよう。

ジャニス工業は衛生陶器や洗面台など住宅設備機器のメーカーとして、地元ではおなじみの存在だ。昭和10年（1935）、久田窯跡地の現在地に西浦製陶として創業したのが始まりで、戦後間もない昭和23年（1948）から衛生陶器の生産を始める。現在の社名になったのは昭和54年（1979）。常滑の土管メーカー大手のひとつで昭和22年（1947）創業の愛知陶管工業と、土管や建材を製造する関連会社として昭和46年（1971）に茨城県北茨城市に設立した常磐西浦製陶と合併したことによる。J＝常磐西浦＋A＝愛知陶管＋NIS＝西浦製陶でJanisというわけだ。

西浦製陶時代のブランド名「象印」

一般の工場見学は実施していないが、今回は特別に見せていただいた。衛生陶器の基本的な製造工程は、①原料の調合、②石膏型に陶土を流し込んで成形、③二～四日ほど乾燥、④施釉、⑤トンネル窯による約二十四時間の焼成、という流れで、標準的な商品だと完成までにおよそ一週間を要する。トンネル窯での焼成はもちろん、成形も施釉もすべて自動化されているが、工場内には思った以上に多くの人がおり、製品に向き合って真剣なまなざしで作業に没頭している。どれだけ自動化が進んでも、細部を整え、厳しく検査するのは人間でなくてはならないのだろう。優れた技術の継承だけでなく高い品質の継承も常滑焼の真骨頂。ジャニスにもその精神がしっかり根付いているからこそ、ユーザーから高い信頼を得ているのである。

社屋にはショールームが併設されているので、興味のある方は覗いていってもらいたい。ここまで歩いてきた人は、知多バスで市街へ戻ろう。その際は、ジャニス工業前バス停にもぜひ注目を。下り線の待合所のベンチがトイレになっており、最後にクスっと笑わせてくれること請け合いだ。

ジャニス工業前停留所

〈取材協力〉片岡誠さん／相羽民枝さん／常滑市山方区／宝壺山天澤院／常滑山真福寺／御嶽山洞雲寺／ジャニス工業株式会社／常滑市陶磁器会館／常滑市生涯学習スポーツ課／とこなめ陶の森
〈参考文献〉常滑の陶業百年（とこなめ焼協同組合）／常滑陶器誌（常滑町青年会議所）／常滑案内（藤井廣吉）